



神戸の治水を100年支えた 貴重な土木遺産

明治22年に誕生した神戸市は、
湊川により東西に分断されていました。

両岸の民家よりも高い場所を流れる天井川であった湊川は、
しばしば氾濫を起こし、洪水のたびに六甲山から大量の土砂が
神戸港に流入していたことや、明治29年には暴風雨による決壊で
多数の犠牲者を出したことから、河川の付け替え工事が決定。

明治34年“湊川隧道”が誕生しました。

この工事は、神戸水道事業、兵庫運河開削の港湾事業と並び、
神戸における明治期の三大土木事業といわれています。

平成7年には、阪神・淡路大震災により下流側の吐き口が崩壊、
平成12年、河川災害復旧事業により、
従来の2倍の断面積を持つ“新湊川トンネル”として
生まれ変わりました。

しかし湊川隧道を近代土木遺産として残そうという
声に応え、保存されることに。

現在は、隧道内の一般公開やミニコンサートなどを通じ、
地域の宝として愛されています。



現在の湊川隧道の入り口(月に1回一般公開)

取材協力:湊川隧道保存友の会

月に一度の一般公開や講演会、音楽コンサートの活動を通じて、湊川隧道の素晴らしさを伝える「湊川隧道保存友の会」。平成21年3月にはこうした活動が評価され、地域の魅力や個性を活かした優れた活動に贈られる「手づくり郷土(ふるさと)賞」を受賞した。



毎月第3土曜に隧道内で開かれるミニコンサートの様子



湊川隧道の説明用パネル展示の様子



湊川隧道

◀ 呑み口(上流側) ▶



現在の新湊川トンネル



湊川隧道

◀ 吐き口(下流側) ▶



現在の新湊川トンネル